

譯した」といふ意味に解し、“Übersetzungen in das Uigurisch”と記して居る。⁽³⁸⁾ 無論かゝる見方は獨り此の場合のみならず、すべて他の場合にも同様である。しかし自分は此の解釋については大に疑を抱くものである。何となれば、もしそうしての回鶻の佛典にそれ自身の言語を稱して Türk 語というて居るのならば、ミューラー氏の考ふる所も必しも無理ではないかも知れないが、然も一九一一年にラドロフ氏の譯出した Ārya Rāj avavādaka の回鶻譯本（版）⁽³⁹⁾ の跋には、之を西藏語から回鶻即ちウイグル語に譯した旨が記され、ル・コック（Le Coq）氏もまた後の時代の版本に、回鶻語といふ名稱が見えることを記して居る。かく Türk 語と Uighur 即ち回鶻語と兩の名が同様に所謂回鶻文字の佛典奥書に用ゐられて居ることについて、深く注意を拂はねばならぬ。若しの Türk 語に譯したのといふのを、ミューラー氏の如く回鶻語に譯したこと考へるならば、Türk といふ名と回鶻といふ名とは同一か、もしくは Türk といふ名は回鶻を含むものと見なければならぬ。しかしながら自分は唐代に於るトルコ族自身の書き残した文書中に見ゆる Türk といふ名稱を此の如く解釋することには反対しなければならぬ。漠北に殘る幾多の碑文に據るも、當時 Türk といふ名は無論他の Uighur (回鶻) Türgish (突騎施) Kirgis (黠戛斯) Bajyrqu (拔曳固) 等、今日所謂トルコ族の諸部と對立して用ゐられた一部族の名稱、即ち漢史にいふ突厥に對する名稱であつて、決して此等の一部もしくは數部を含んだ總括的の民族の名、即ち今日吾々がトルコ族と稱する場合に用ゐると同様の意味を有するものではない。従つて前記の奥書に見ゆる如き場合に Türk 語といふものは、漢史に見ゆる名を當てれば突厥語であつて、決して回鶻語であるべき筈はなく、Uighur 語といへばまた必ず回鶻語であつて、突厥語たるべき筈は無い。尤も突厥に於てもその文語の同一であつたことは前にも述べた通り